

ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)
群馬県前橋市元総社町七三―五
TEL 027・2555・3434
FAX 027・2555・3435
http://www.neues-asahi.jp

先日、『ル・コルビュジエとアイリーン 追憶のヴィラ』という映画を見ました。コルビュジエは、上野にある国立西洋美術館の設計をした世界的建築家であり、一九五五年に来日しています。

アイリーン・グレイは、アイルランド生まれの女性。家具・インテリア・プロダクトデザイナー。「ドラゴン・チェア」という椅子は二〇〇九年のオークションにおいて二十八億円で落札されました。

建築家でもあったアイリーンは一九二六年に自身の別荘を南仏カップ・マルタンに設計し完成させました。それは恋人のジャン・バドヴィッチと過ごすために二人の名前からとった(E・1027)です。

建築批評家であるジャン・バドヴィッチを通じて、アイリーンはコルビュジエと知り合い、(E・1027)を舞台に多くの物語が展開していきます。長い間コルビュジエの設計だとされていた(E・1027)はコルビュジエにとっても固執するものでした。勝手に壁にフレスコ画を描いたり、その後(E・1027)が人手に渡っても頻繁に見に行ったりしていたそうです。コルビュジエの「住宅は住むための機械である」という建築の機能主義を取り入れたのとは対比的に、アイリーンは「物の価値は、創造に込められた愛の深さで決まる」との思い。この二人の間には尊敬と嫉妬が絡み合い時間が流れます。モナコ湾を臨む崖に建つ(E・1027)の映像は美しいものでした。

国立西洋美術館に出かけた時は、コルビュジエの近代建築五原則の要素である①ピロティ(建築の一階を柱だけ残し、吹き放しとする建築様式、その空間)②屋上庭園③自由な平面④水平連続窓⑤自由なファザード(建築の正面部分)などを意識しつつ、作品を鑑賞したいと思います。

コルビュジエは、一九六五年に(E・1027)があるカップ・マルタンで海水浴中に心臓発作で七十八歳で死去。アイリーンは、一九五〇年代から視力悪化により引退し一九七六年パリにて九十八歳で死去。

(E・1027)の美しさを映像で見ながら「住居空間」について考えています。玄関、居間、キッチン、浴室、和室、寝室、仕事部屋、収納室、庭……。そして動線。居心地の良さ、機能面、家具、インテリア、食器など……。長年住み慣れた空間を一新。花粉症が少し落ち着いたらレイアウト変更。少しでも住みやすい空間づくりをしていきたいと思いました。

赤城、榛名、妙義の山々や浅間、遠く谷川連峰、日光の山々と、そして空も広く、自然豊かな群馬です。

(武藤)

ノイエス朝日(展覧会)のご案内

小松健一作品展

〈企画〉

民族曼陀羅 中国大陸

多様性の中に共生する人びと

会期 三月三十日(土)～四月七日(日)

午前十時～午後五時三十分

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

ギャラリートーク (入場無料)

「民族大陸83270kmの旅」

三月三十日(土)・三十一日(日)

四月六日(土)・七日(日)

午後二時～三時

特別出品

眞月美雨「桃源郷」より

住谷夢幻展

墨のアフォーリズム

〈企画〉

会期 四月九日(火)～十七日(水)

午前十時～午後五時三十分(最終日は午後五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

白紙に垂れた一滴から始まる物語

一瞬でひらかれた線の躍動

自己解放から何が生まれてくるのか

詩に内在している新しいもの

見えないものが見えてくる

墨の表現で試みている

夢幻の最新作を展示します

樺澤健治作陶展

会期 四月十九日(金)～二十五日(木)

午前十時三十分～午後七時(最終日は午後五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

四月二十七日(土)～五月六日(月・祝)
ノイエスは、休廊しています。

ノイエス少し気になる「本」コーナー

ノイエスでは、二月に開催しました「ふる本市」の一部書籍を「500コーナー」として展示販売しています。展覧会をご覧になりながら手にとって頁を開いて下さい。新しい出会いがあります

高崎映画祭が始まります！

先日、久しぶりにシネマテーク高崎で「バスキア、10代最後のとき」を見てきました。一九八八年に二十七歳で亡くなったバスキアの秘蔵コレクションを軸に友人たちの証言、同時代のアートを当時の空気の中で感じられるドキュメンタリーでした。その折、高崎映画祭の豪華冊子が置いてあったのでいただいできました。

この映画館が近くにあつたら・・・と映像好きにとつてはちよつと残念に思っています。それでも気になる映画は、なるべく見に行くようにはしています。

三月二十三日(土)～四月七日(日)まで「第33回高崎映画祭 受賞作品」邦画セレクション2018、洋画セレクション、子供映画館、監督たちの現在、ポランド映画特集、その他イベントもあるそうです。

久しぶりに冊子片手に映画館の空気を楽しんでみてはいかがでしょうか。「映画って本当にいいものですよ」

「第3回 楢円会」が三月十日(日)で終了しました。

九日(土)の「制作の現場を語る」には、掛川孝夫、小林正、河内世紀一、酒井重良、住谷夢幻、藤森カツジ、福島保典、真下京子の出品作家八名が並び、展示作品についての実際の制作現場での仕事を少し公開してくださいました。

作品の裏に込められた想いや長年の制作姿勢、また具体的な技法など普段では語ることのない言葉に来廊された五十数名の参加者は興味深く聞き入っていました。

展示だけすれば良いというギャラリー空間から一歩違った多面的な新しい道が少し開いた気がしています。

そしてコミュニケーションの重要性はますます必要になってきていると思えた一日でした。